

「大腸内視鏡治療」

工藤 進英 著

早期胃癌検診協会理事長

丸 山 雅 一

世に俊才、俊英と言われる人は少なからずいる。しかし、ひとつのことにこだわり、飽くことなく真理の探求に情熱を燃やし続けることは、単に才能に秀でているだけの人間には決して成し遂げられない業である。そして、工藤の一連の仕事を見続けてきた筆者は、今、ある種の興奮と戦慄を覚えながら、自分の心を震撼させているものは、一体何なのか、を探りたいと念じながらこの小文を書き始めている。

工藤が、この本の中で読者をその気にならせたいと思いつめていることが2つある。1つは、大腸腫瘍の“発育形態分類”であり、もう1つは、“pit pattern 分類”である。

前者について言えば、工藤は少数派であり、論争がなされるたびに、肉眼分類の基本的な思想とは何かという1点において、その考え方は理解されるものの、認知されるには至っていない。これは、「胃と腸」35巻(12号)の座談会「早期大腸癌の肉眼分類—統一をめざして」の内容をみても明らかである。

後者は、前者のような純粋に思想的な問題ではなく、新しい分類法の提唱であるから、これを手段として活用する若い世代の内視鏡医はこぞってその有用なることを強調するであろう。また、何よりも、患者が受ける恩恵という点においても、工藤の主張には妥当性がある。

筆者は、前者を語る工藤の姿勢の中に、その本質を視る。この人は、確信に満ち、葛藤から自由な人格をその主張の前面に押し出して堂々としている。この姿勢は、三部作の最後というこの著書において簡潔だが鮮明に浮き出ている。そして、自分の思想を込めた内容が多く含まれている。

筆者を震撼させているものを具体的に言うならば、それは、工藤が、“普通研究者”に“創造的な闘い”を挑んでいるのだという確信である。筆者は、“普通研究者”という言葉に先を書いたが、それは、“パラダイムを創造する科学者”(トーマス・クーン)として工藤を位置づけたいがためである。そして、われわれ、“普通研究者”は、不世出とも言うべきこの創造的な研究者と同時代に生きていることの興奮を大事にすると同時に、批判的な立場を忘れてはならない。

大腸に陥凹型腫瘍が存在することを証明したことのみを取り上げても工藤の業績は、世界に冠たるものである。そこで、次なることは、これを武器にして、日本が工藤を前面に押し出し、西欧的な大腸癌のパラダイムをどのように変えていくか、ということである。武藤が“推薦の序”で強調しているように、これからは、欧米と渡り合うための戦略・戦術を考えるときである。

この本には、工藤の思想が多く含まれている、と書いたが、思想を多く語ることは、それだけ誤謬を犯す危険につながることも歴史に見るとおりである。創造的な仕事の中で、ある種の考え方が確信に変わるときには、そこに至る過程の中にどれだけの証拠が存在したか、を検証しなければならない。その意味において、例えば、“早期大腸癌の発育進展様式”は控えめに“早期大腸癌の発育進展様式の仮説”とすべきであろう。生物学における客観的事実とは、合理的で単純明快なものでなければならないものではなく、そこには、多くの紆余曲折が存在するものではないか。工藤の内なるもののなかに、そのように考える余裕が生まれたときに、その思想は揺るぎないものになるはずである。それまでは、試行錯誤を繰り返しつつ思いたぎる思想を熟成させ、戦略と戦術を練り上げてほしいものである。

それまで、筆者は、工藤の思想に共鳴しながらも、あえて、批判的な立場を随所でとり続けるであろう。“パラダイムを創造する科学者”としての工藤を愛するが故である。

● B5 頁 176 図 28 写真 4
カラー写真 147 色図 6 表 22
2000 定価(本体 15,000 円 + 税)
送料実費